

山と博物館

第50巻 第1号 2005年1月25日

市立大町山岳博物館

第50巻目を迎えて 大町山岳博物館



「山と博物館」は昭和三十一年(一九五六)年二月に「やまと博物館」として創刊し、昭和三十二年一月に「山と博物館」と改題し、現在までほとんど欠くことなく毎月発行されてきました。その間、各分野の方々に原稿を寄せていただき、北アルプスを中心とした山岳の自然や歴史などの「山岳文化」と大町山岳博物館の活動について広く情報発信を続けてきました。こうして積み重ねられてきた貴重な情報は、まさに「博物館の財産」といえます。

創刊号をもういちど見直してみると、その誌面からは開館して間もない「若い博物館」の姿が生きいきと伝わってきます。内容はという

と、保護されたカモシカの話題、収蔵する標本の紹介、動物に関する素朴な疑問と答え、各種のお知らせなど。北アルプスの自然や文化あ

るいは博物館の活動について、豊富な話題や写真を提供しながら、できるだけ分かりやすく紹介したいという思いがうかがえます。

時代の移り変わりとともに、当博物館の果たすべき役割もあらためて問われています。

将来へ向けて、本誌が北アルプスと博物館、そして読者の皆さんとを結ぶ「架け橋」となるよう今後もよりよい誌面づくりに一層の努力をしていきたいと思ひます。

かもしか
Japanese Serow

こんど、山岳博物館の附属動物園に新しくはいつたかもしかの赤ちゃんです。日本で*かもしか*を飼育しているのは、東京の上野動物園と、名古屋の東山動物園、そして大町の山岳博物館の3ヶ所だけです。貴重な動物ですから、大切に育てたいと思ひつてます。

NO. 1 1956年2月20日

大町山岳博物館後援会 発行

昭和31年(1956)2月20日に発行された創刊号の表紙
当時は『やまと博物館』という誌名で、体裁は横書きのスタイルでした。

山岳雑誌の編集に携わって(上)

—興味尽きない海外登山報道—

西山暉大

七〇年代はエベレスト登頂で始まった

いま国内で発行されている山岳雑誌は？と問えば、多くの登山者が「山と溪谷」「岳人」「新ハイキング」と答えるでしょう。三誌はいずれも月刊誌で、毎月十五日に発売され、それぞれ愛読者がついている。三誌のほか、シーズンを考慮した季刊雑誌も発行されていて、夏山シーズンになると「山溪JOY」「岳人別冊」が書店の売り場に山積みされ好評を博している。これらの山岳雑誌が店頭を賑わすようになったのは今から三十数年前、一九六五年ごろからではないかと思う。「山と溪谷」(山と溪谷社発行)は昭和五年に発行されているし、「岳人」(中日新聞社発行)は戦後すぐの昭和二十二年に京都の「岳人社」が発行、二十四年からは中日新聞社が発行している。「新ハイキング」(新ハイキング社発行)も二十五年に発行された雑誌で、新ハイキングクラブの会誌の性格を帯びている。

登山ブームが高揚し一九七〇年代を迎えたときの一大イベントが日本山岳会隊によるヒマラヤ・エベレスト(八八四八m)登頂である。七〇年五月十一日、松浦輝夫、植村直己の二人が東南稜から日本人初の登頂に成功。南西壁登攀も八〇五〇mに達し、登山界ばかりではなく日本中がこの朗報に沸いた。この時、筆者はたまたま東京新聞(中日新聞東京

本社)に在籍しており、新聞の校閲記者をしていた。六〇年代の後半から国内の山での遭難が頻発し、新聞には悲しい見出しが踊った。「三人よれば山岳会」などと呼ばれ、巷では大きなザックを背にした登山者が人目をひくようになった矢先の朗報がエベレスト登頂であった。

登山ブームにあやかり筆者は七〇年秋「岳人」誌へトレドされた。そして夢想だになかった三十数年間の出版人生が始まるのであった。七〇年は日本隊も海外登山で多大な成果をあげネパール・ヒマラヤではツクチェピーク、アンナプルナIV峰、ダウラギリVI峰、マカルー、P29、ダウラギリ主峰などが登頂された。日本女子隊のアンナプルナIII峰登頂という快挙も高く評価された。雑誌の編集記者として海外登山の概要を取材し、誌面化に励んだ。

雑誌記者になって三年目の七三年秋、RCIIエベレスト登山隊が十月二十六日、秋季初登頂(石黒久、加藤保男)を果たした。湯浅道男隊長の最終判断「南西壁は断念、東南稜からの秋季初登頂を目指す」の心境を「岳人」で誌面化した。南西壁登攀の成否が注目されていた時代だっただけに、山岳界でも評価が分かれた。その後、七四年成城大隊のジャスー、七五年女子隊のエベレスト(田部井淳子女性初登頂)、七六年山学同志会隊のジャ



【写真1】

に外国登山隊の中国での登山規則を収録した。和文、英文併載の本書は好評で中国登山協会からも感謝された。この出版が契機になり、中国登山協会とは親密な友好関係が保たれることになった。

五月三日には日本山岳会隊がチョモランマ東北稜からの登頂(加藤保男)と北

壁初登攀(重広恒夫)に成功。加藤保男は南北両面からのエベレスト登頂者になった。インタビューで「高山の登高のほうが楽です。都会の道を歩く方が難行です」と答え、七三年のエベレストで足の指を凍傷で失ったことを自嘲していた。その彼も八二年十二月二十七日、厳冬期エベレスト初登頂のあと下山時に消息を絶った(三三三)ときは悔やまれてならなかった。取材にはいつも笑顔で協力してくれた。「ヤッチャン」の愛称で呼ばれ

人気者だった彼には、森村桂や吉永小百合がファンとして付いていて、登頂報告会で彼女らから花束を贈呈されたのには驚いた。登山家として稀有の人気者だったこのエピソードである。

『中国の高峰』出版と

チョモランマ、チョヨリ登山

八〇年代は中国登山の開幕で始まった。ヒマラヤを中国側から登ろう、という計画がヨーロッパやアメリカ、日本の登山家によって具体化された。目玉はチョモランマ(エベレスト)の北面ルートからの登頂であった。「中国の高峰」は解放された秘峰の数々としてチョモランマやシシャパンマ、コンダール、ミアコンガ、アムネマチン、ムスターグ、アタ、ボコダなどを写真と記事で紹介。巻末

八一年の夏には中国・天山山脈のボコダ峰遠征隊の報道記者として筆者は現地に派遣された。在京の主だった登山用具店が合同で派遣する登山隊(内田良平隊長)で、東京新聞が紙面後援した。八月七日にボコダIII峰(五二二三m)に初登頂した。新聞に登山記

事を送ったり、帰国後「岳人」でグラフを組んで中国登山を紹介した。解禁されたばかりの天山山脈の山々は人気が高く、ボコダ山塊だけで日本隊が六隊も入山した。主峰は六月に京都隊が初登頂した。人気のコンケール峰は英国ポニントン隊が七月に初登頂した。注目されたのは八月に「日中国交正常化十周年記念チヨゴリ峰登山」が日本山岳協会隊に許可されたことである。九月には小西政継偵察隊長らがチヨゴリ(K2:八六一一m)北面に入域し、輸送路や登山ルートを偵察した。カラーグラフと記事で山域を紹介し明るい見通しを詳報した。

八二年八月十四日の登頂成功を「チヨゴリ峰登山の光と影」の見出しで誌面化し、小西登攀隊長のインタビュを掲載した。「世界の潮流に恥じない登山を行い、無酸素、全員登頂を目指したが遭難者が出た。大量登頂は果たしたが成功率は40パーセント」と総括している。この年は奇跡の生還劇もあった。中国・ミニヤコフ峰で五月一日に遭難した松田宏也が、十九日ぶりに山麓の地元民に救助された。凍傷で両方の脚を膝下から切断、両手指も切断し血液も殆ど入れ替えるという、中国医学の処置で命は救われた。この報道のあと筆者は編集人の職務につき、誌面作りだけでなく経費や販売対策、広告収益にまで目配りすることになった。しかし海外登山の誌面作りは続けた。

八三年は十月にエベレスト登頂後、下山時に遭難した吉野寛、禿博信(イエティ隊)と登頂後、無事に下山した山学同志会隊、アメリカ隊を取り上げ、エベレストの混雑状況と問題点にスポットを当てた。八四年はビッグニュースが飛び込んだ年だった。二月に植村

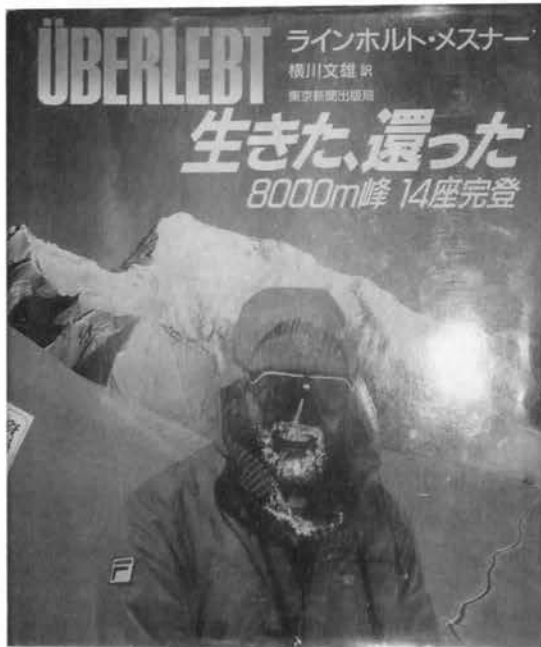
直己がマッキンリーで遭難。捜索に当たった大谷映芳のカラーグラフでマッキンリーの寒気と強風の厳しさを詳報した。中国登山ではナムナニ峰(七六九四m)が許可され、偵察が行われた。カラーグラフで、たおやかな山容と登頂の見通しを紹介した。「ナムナニ峰日中友好登山隊」(平林克敏隊長)は翌八五年五月二十六日、無事登頂した。インド登山でモーストンカンリ(七五一六m)が日本ヒマラヤ協会隊の山田昇と吉田憲司によって九月十五日に登頂された。筆者が山田昇と親しくなったのは、この誌面作りからである。

メスナーの八千メートル峰十四座完登と山田昇のエベレスト交差縦走

八五年は山田昇のK2(八六一一m)登頂が始まった。七月二十四日、ノーマルルートからの無酸素登頂で彼自身も納得のカラコル

ム登山だった。驚いたのはこの後。十月には「植村直己物語」の撮影でエベレストに無酸素登頂。カトマンズに下山したその足でマナスルに向かい、十二月十四日斎藤安平とアルパインスタイルでマナスル(八一九三m)に登頂、日本人初のハットトリック(三座登頂)を果たした。ハットトリックはサッカー用語で、一試合に3点のゴールを果たす言葉。これを転用して「岳人」が初めて登山用語として使用した。

八千メートル峰のハットトリックが日本で刮目されていたころ、世界では八千メートル峰十四座完登が時間の問題となっていた。八六年十月、イタリアのR・メスナー(当時四二歳)がネパール・ヒマラヤのローツェ(八五一六m)に登頂して十四座完登の偉業を達成した。このニュースを耳にした筆者は間髪を入れず中日新聞社のドイツ・ボン特派員(北村哲男)に連絡して独占インタビューを実施。「岳人」八七年一月号で「八千メートル峰を全て征服して自由になったかった。無酸素登山は脳細胞を若返らせる云々」というメスナーのユニークな発言と美しいカラー写真で誌面を飾った。さらに夏にドイツで出版するメスナー著「生きた、還った 8000m峰14座完登」の翻訳本の出版権も取得。八月には「岳人」創刊四十周年記念



【写真2】

出版と銘打って「生きた、還った 8000m峰14座完登」(写真2)をカラー写真を付けて翻訳出版した。大きな反響を呼んだ出版でメスナーの登山哲学が随所に網羅されている。

一方、山田昇の勢いは益々ヒートアップし八七年冬にはヒマラヤアンナプルナー峰(八〇九一m)南壁登攀に群馬岳連隊として挑戦し十二月十九日、斎藤安平ら三人とともに山頂に立った。しかし下山時に小林俊之、斎藤安平が転落死。山田は斎藤の死を悔やんでネパールから「アンペー」が転落死するなんて考えられませんでした。八千メートル峰はきついです。」の手紙をもらったことを覚えている。

誌面は迫力のあるアンナ南壁のカラー写真と記事で飾ったが、二人の死亡事故は重く心に残った。翌八八年二月、前橋市で行われた斎藤・小林の二人の葬儀で山田と話したあと、彼はエベレスト交差縦走に出発した。この時、山田は八千メートル十四座登頂を心に決めていたように、その模様をなんとか誌面化したかった。これは一年後に佐瀬稔の連載企画で具体化できた。

八八年はエベレスト交差縦走(チヨモランマ/サガルマタ縦走)が中国、日本、ネパール三国の合同登山が行われた。タクティクスは日本山岳協会隊によって立案、指揮が行われ山田昇が五月五日の「子供の日」に計画通り中国側から登頂してネパール側に下山した。この模様はテレビで詳しく報道され、このテレビ報道を転写して「岳人」に掲載した。反響は大きく五日の登頂を十日後の十五日発売の雑誌(「岳人」六月号)に掲載した速報に読者は驚いた。これは雑誌記者(筆者)が「速報」を企てたものだが、印刷会社や製本会社、

取次会社が連携しなければ不可能である。国際的なイベントだったので関連各社が協力してくれた賜物である。

この遠征が終わってからのというもの、山田昇の行動は激しくなった。エベレストの交差縦走が終わったあと六月にマッキンリー、夏にモンブラン、九月十月にはアコンカグアとキリマンジャロへ。十月に中国のシシャパンマ(八〇二二m)、十一月にチョーオユ(八二〇一m)を登り、二度目の八千メートル峰のハットトリックを達成、残す八千メートル峰はマカルーなど五座となった。チョーオユから帰国した八八年暮れのこと、山田に「岳人」で「十四座完登」の連載企画を佐瀬稔の執筆で行うことを了解してもらった。

八九年の年明け早々、三十八歳の山田昇は冬のモンブランに向いた。登頂後シャモニに下山した彼はそのままアラスカに向かい、冬のマッキンリーに三枝照雄、小松幸三の三人で挑戦したが二月二十一日、テントキパー

の佐藤俊三との交信を最後に消息を絶った。三月十五日発売の「岳人」四月号で、佐瀬稔執筆の新連載「ヒマラヤの巨峰十四座登頂をめざす第三の男・8000mの散歩者山田昇」が発売される直前だった。佐瀬は第一回の連載のなかで、「山田はマッキンリーのあと再びヨーロッパに戻り、冬のエルブルースを狙う。これが済んだら世界初の「冬季五大大陸最高峰」完登になる」と記している。「急がねば冬が終わってしまう……」と山田の心情を綴っている。

十五回の連載は九〇年六月に終了し九月に単行本「ヒマラヤを駆け抜けた男」(佐瀬稔著)【写真4】として東京新聞出版局から出版した。この出版を機に筆者は月刊誌「岳人」を離れ季刊雑誌の「岳人別冊」(夏山号、秋山号、スキー号)の編集人に転出した。(本文敬称略)

(元「岳人」編集長
つづく)

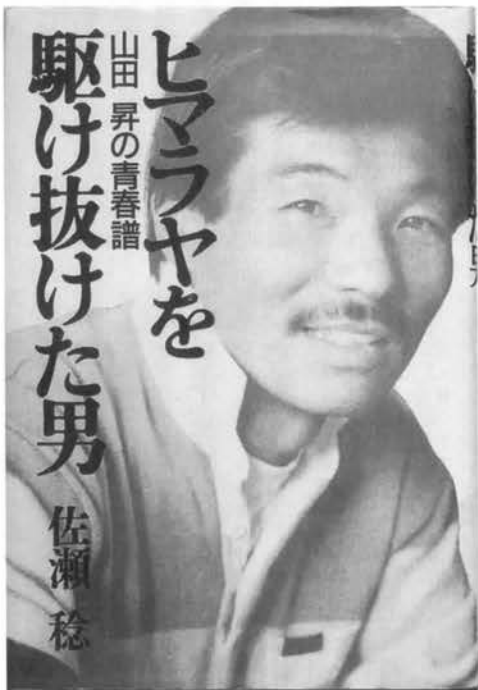
バックナンバーのお知らせ

次の巻号の「山と博物館」バックナンバーがあります。ここで紹介した各号収録の題名・著者は主なものですので、詳細についてはお問い合わせください。(大町山岳博物館)

- ▽第39巻7号(平成6年7月) 「山の描き方」 関戸紹作
- ▽第39巻8号(平成6年8月) べんのう滝 田中欣一
- チベット高原・ニンチェンタグラ山脈東部の自然と動物 泉山茂之
- ▽第39巻9号(平成6年9月) ヨーロッパで初めてのカモシカ繁殖成功
- 千葉彬司
- 日本産野ネズミ類の寄生線虫—そのルーツを探る— 浅川満彦
- ▽第39巻10号(平成6年10月) フォッサマグナと特別展 平林照雄
- フォッサマグナ特別展によせて 平林照雄
- ▽第39巻11号(平成6年11月)



「岳人」500号の表紙を飾った小西政継



【写真4】

- 暁のファンタジー 西村武志
- エゾライチョウの秋と冬の食性 藤巻裕蔵
- ヒマラヤを越えるツル 松田雄一
- ▽第39巻12号(平成6年12月) 年頭の槍ヶ岳にて 飯澤元啓
- 近代洋風数寄者・加賀正太郎 大塚融
- ▽第40巻1号(平成7年1月) 冬の遠見尾根 上田栄次郎
- 山岳博物館顧問羽田健三先生を偲ぶ 阿部西与

- 最近のタヌキ事情 千葉彬司
- ▽第40巻2号(平成7年2月) 岳樺 内川芳郎
- 動物の足跡 子安和弘
- ▽第40巻3号(平成7年3月) 八ヶ岳雑念 笠原良雄
- ツタンカーメンのエンドウ—古代への 夢とロマンを求めて— 尾川元洋 (敬称略)

バックナンバーの請求方法

右記にご希望の巻号がありましたら、一部一〇〇円にて販売いたします。博物館窓口でお申し込みいただくか、または巻号・部数をお明記の上、現金書留か口座振替で「大町山岳博物館宛」金をご送金ください(送料当方負担)。

山と博物館 第50巻 第1号
 発行 二〇〇五年一月二十五日発行
 〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六—一
 市立大町山岳博物館
 TEL 〇二六—二二一〇二二
 FAX 〇二六—二二一〇三三
 E-mail: sanpakku@city.omachi.nagano.jp
 URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpakku/

印刷 柳奥村印刷
 定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
 郵便振替口座番号 〇五〇四—〇七一—三三九三